



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ダーウィニズム再考
Author(s)	増淵, 法之
Citation	教授学の探究, 6, 1-3
Issue Date	1988-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/13548
Type	departmental bulletin paper
File Information	6_p1-3.pdf



ダーウィニズム再考

増 淵 法 之

(北海道大学理学部)

はじめに

中、高校の社会科教育の分野において歴史の教科書が問題となったが、この問題は基本的には解決したとは思われない。中国や韓国などからの意見のまえにおとなしくしているにすぎないのであろう。この点は靖国神社の大臣の公式参拝と軌を一にするものであろう。また最近では社会科そのものの改変が実現することになってきた。この動きがそれらと係わりがなければ良いと思われるのだが、はたしていかがなものであろうか。それらの動きとは立場は異なると思うのだが、私も大学の教養で講義をしてきた経験から次のようなことを考えている次第である。講義に登場する人物名についていままでに聞いたことがあるかどうかということで学生に質問してみるのだが、その反応は意外と悪いのである。たとえばスペンサーやキューヴィエなどはほとんど知らないし、マルサスも手のあがらない学生がかなりあるのには驚いたのである。これらの名前は常識的であると判断していた私にとってはあわてて簡単な解説をしなければ話が進まず困ったことであった。そのようなことであるので科学あるいは社会の発展過程の前後関係をどう理解するのかについて今の学生ははなはだ弱いように思われる。

これらの原因は窮極的には受験勉強一点張りの教育の欠陥であろうが、それに流されてしまう教師の側にも一面の責任があろうかと思う。教科書を代えれば良いということではなしに方法論を大事にすることに問題解決の基礎があると考え、教師もその点を自分のものとしなければならぬであろう。この点をどう解決するかは教育の専門家をお願いすることにしてここでは私の専門としてきた進化論関係でいくつかの話題を提供したいと思う。

ダーウィンとマルクス

ダーウィンとマルクスの関係は一般には冷ややかなものとされてきた。その理由にあげられるのがダーウィンの記念館の書斎にある、彼が「種の起源」を書いたであろう机の上に置かれているマルクスの「資本論」である。この書は英訳版で、その出版にあたりマルクスからダーウィンに献本されたものである。それにはマルクスの署名があるのだが、フランス綴じなので頁が切られていないことが明らかなのである。したがってダーウィンはそれを読んではいないとされてきたわけである。しかしダーウィンからマルクスにあてた手紙には次のような重要なものがある。

「あなたがたの見解を支持しますが、自分としてはそれを自然科学の分野に限定した方がより効果的ではないかと考えております」

この点はマルクス、エンゲルスのダーウィンに対する評価と密接に関連するであろうと思われる。彼らはダーウィン説のなかにある問題点を指摘はしているが、その基本的な考えが弁証法にのっとっていることを正しく評価したことが容易に理解されるであろう。これに関連して

今ひとつ大事なことをみてみよう。それは生命の起源についてのダーウィンの判断である。これも手紙のなかに書かれたものである。したがって当時エンゲルスはそのことには気がつかなかったのであろう。もし知っていたならばこの点も高く評価したであろうと思われる。この点はまたダーウィンがラマルクと対比される最大の差なのでもある。ラマルクの見解は自然発生をまだ認める立場にあったので高等の生物の発生は古く、下等な生物のそれは新しいと見（この用語も現代的には単純なものから複雑なものへとすべきであろうがラマルクにしたがって使った）、現在でも自然発生がありうるとしたのであった。これに対してダーウィンは過去に発生があって今みられないのはなぜかの質問を自ら出してそれに次のように答えている。過去と現在の違いはなにかといえば、それは現在は生物がおり、生命の発生以前には生物は存在しなかったと述べている。その説明として無機物から複雑な物質、有機物が形成されるであろうが現在は生物が存在するのでそれによりこれら有機物は分解されてしまい、その後の発展はない。しかし生物の存在しない以前にはなら妨げられることなしに生命の起源を迎えることができたというのである。当たり前のことではあるがまさしくコロンブスの卵のたとえとなるであろう。生命の起源の問題はやがてオパーリンにより科学的に明らかにされるがそれは1924年になってからである。19世紀にすでにこの見解を示したのはエンゲルスとダーウィンだけであった。もっともエンゲルスの「自然弁証法」も印刷されたのは1925年を迎えてからであった。この間、自然科学の分野を支配したのが不可知論であった。オパーリンまでの科学の遅れはこの方法論の貧困に負うところのものであろう。

進化論のわが国導入にあたっての定説も再検討されるべきであろう。定説ではモースが始め東京帝国大学でダーウィンを紹介したことに始まるとなっているが、それよりも先にスペンサーが紹介されている。それに関連してその基礎にダーウィンの理論があるとしてダーウィンが紹介されている。ついでフェノロサの名前がダーウィンの紹介者として登場しているが彼も社会学としてスペンサーを紹介したのであった。スペンサーは唯物論の立場ではあったが先にふれた不可知論の提唱者でもあった。わが国では進化論が明治政府により推進されたとされているが、事実はこのようにスペンサーを通してであり、はじめからそれが社会ダーウィニズムであったからである。

この点はダーウィンとスペンサーについてみると面白い。進化はevolutionの訳語であるが実はダーウィンの「種の起源」にはその動詞形はあるがこの名詞形はないのである。それではダーウィンはなんと表現しているかということ descent with modification である。彼のいま一つの著「人間の由来」は Descent of man であることから理解して頂けよう。なぜこのようになっているかについては二つほど理由があげられている。ひとつはそれまでに evolution が発生学の分野の用語として使われていたのである。これは現在死語となっているのだが、ダーウィンはそれを尊重して区別したというのである。しかし本当のところはスペンサーが積極的に使った evolution とは異なるとのダーウィンの判断があったのではないかと思われるのである。スペンサーやヘッケルなど一律に進化論者として片付けられているが、ダーウィンにしてみれば彼らと同じにみられることに抵抗があったと思われる。彼らはまだ機械論の立場に留まっていたのであり、ダーウィンだけが弁証法を理解していたのである。彼が生命の起源を正しく理解したことと関連してみてはじめて正当に評価できよう。

この evolution にわが国では自然選択と自然淘汰があげられている。どちらでもよさそうなものであるが少しく考えてみる必要がある。戦前の書は総てとってよいであろうが自然淘汰

である。先輩の用意した言葉であるからという理由でそれを使う立場もあろうが、検討してみる価値があろうかと思われる。

辞書によれば選択とは保留と淘汰の両側面を合せ持つ言葉とある。単純にみても淘汰はその一側面を指すことになる。もっともこれらの関係は切り離せないのであるから片方を述べても意味は通じるのではあるが、ダーウィンはどちらに比重を置いているかをみれば選択が妥当となるのではないかと思われる。

彼は生存競争の説明として「私はこの言葉をひろい比喩的な意味で、一つの生物が他の生物に依存することを含め、また（これはいっそう重要であるが）個体の生命を継続するだけでなく子孫を残すに成功することまでも含めて使用することにする」と述べているのである。このことは如何様に途中で死滅する個体が多かろうともそれに意味があるのではなく子孫を残すに成功することに意義を認めているのであり、これは明らかに保留に比重があることになる。一般には生存競争とは篩の役割として説明されるが、この解釈が淘汰として使われる理由でもある。これではダーウィンの本旨とは異なることになるであろう。

今一つあげれば字を同じくする中国でも自然選択が使われている。かつては日本の影響もありやはり自然淘汰も使われたこともあるようであるが、いまは自然選択である。ではなぜ日本では自然淘汰が使われてきたのであろうか。それは先に見たスペンサーのわが国導入の歴史から見るができるであろう。彼の見解はエンゲルスの指摘したことではあるが当時のイギリス社会の反映なのである。社会の法則と自然の法則は同じではないこともエンゲルスがすでに指摘していることである。ダーウィン説のなかからこれら社会ダーウィニズムを排除するのが妥当ではないかと思われるのである。そうすれば当然にも自然選択が残るであろうと考えるのだがわれわれに染み込んだ歴史の圧力はそう簡単にはぬけきれないのであろう。幸い教科書は自然選択である。これについては淘汰は制限漢字だからという言い分けも聞くが、その裏には自然淘汰のほうが学問的だとの判断もあるようである。私は用語は思想を反映するものと考えており、その立場から以前には先輩にならって自然淘汰を使った時期もあったが今は自己批判して自然選択を使うことにしていることにふれて本論を終りにしたいと思います。